

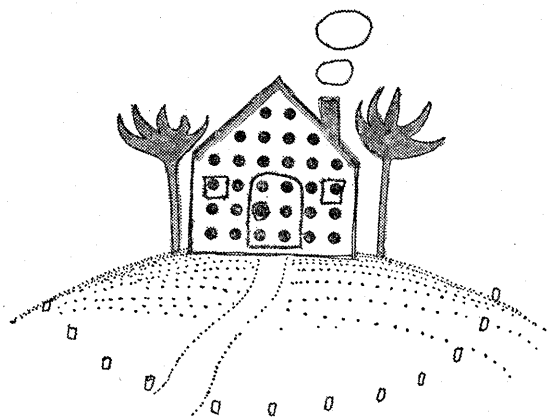
いろいろなことを

教えてくれる子どもたち (11)

村 石 京 子

○なすの実

私どもの園では毎年夏休みの間、毎日の生活の記録を母親につけておいてもらい、それを休み明けに担任へ提出することを続けております。この記録を読むと、子どもの夏休み中の健康状態や、家庭での過ごし方を知ることが出来るとともに、母親自身のものの考え方とか、子どもへの接し方などとも知ることが出来、随分参考になることが多くあります。ところが年長組では、今年はなすの植えてある鉢を一ケずつ夏休みに家庭に持って帰り



ました。このなすは、六月下旬に子どもたちが自分で土をつくって植木鉢に入れ、小さな苗を移植し、肥料をやり、支柱をたて、そして毎日水やりをせずと育ててきたものです。うす紫の花が咲くと、花が咲いたといっちは喜び、可愛い紫の実が結ぶと歓声をあげて報告してくれたりしておりました。

やがて早々と実ってつやつやの光沢をした幾つかのなすの実は、幼稚園で収穫して、おべんとうのときうすく切って塩もみをし、かつおぶしをかけて食しました。「おなすはきらいだよ」と言っていたT子もY夫もS子も、「幼稚園のは特別においしいのよ」の言葉につられて思わず箸が出て「おいしかったよ」と言ってくれました。N男とY子は「おなす、大好き」と言って「他のおかずはいらない、おかわりちょうだい」と言った程でした。

そしてこの大切ななすの鉢は、夏休みになると夫々の家に持ち帰り、引き続き育てることになったのです。長い夏休みが終って、九月の二学期の始業の日には、夏休みの生活記録は夫々の子どものかいた絵表紙でとじて提出されました。この夏休みの間、子どもたちがどんな生活を送ったのかを知る楽しみと、読んでも読んでもなかなか半分も消化出来ない苦勞とを計りあいながら、一冊ずつ夜なべして記録を読むのでした。

今年は共通した体験として筑波万博に家族で行ったことの感想と、日航機事故の悲惨さを子ども心に感じとったことなどが書かれてありました。これは年長組の子どもたちが、社会の出来事に大分関心をもち、世の中とつながりをもつようになってきたことの現われ

であると思いました。そしてもう一つ、特筆すべきことは、持ち帰ったなすの話題です。

子どもたちは幼稚園から持って行った自分の名前のついた鉢をとても大事にして、水やりも毎日忘れず行なっていたということです。丹精の結果、嬉しい収穫があると「大事に仏様にお供えしてから、おみそ汁に入れました」という記録や、「幼稚園と同じようにしてと言われて、塩もみをこしらえて家中で食べましたが、先生の方が上手だったと言われました」という報告、「おばあちゃまがぬかずけが大好きなので、おばあちゃまのお家に届けましたら、とても喜ばれました」という人、そして八百屋さんの店で買って来たなすと合わせて素敵な名前のフランス料理が夕食に並んだことなど、いろいろな記録がたくさん見られました。「今までは何気なくスーパーの袋詰めを買っていましたが、一ケ作るにもこれだけ手がかかることを親子で知ってよい経験になりました」という感想、「子どもが自分のおなすと言ってとても大事にしている様子を見て、ものを育てることの大切さを子どもから教えられました」という感想など、こちらの思っていた以上に子どもたちの一生けんめいな様子から、母親も一本のなすに気持を向けてくれたのがわかって読んで嬉しく思いました。

けれどもみな収穫があったわけではありません。「大事にしていたのに、風で折れて枯れてしまい、大へんがっかりしました。来年またやってみたいと親子で話しあいました」という記録もありました。「私の家では十ケも収穫がありました」というH子の母からは「お花屋さんで聞いたら、この肥料が実のものにはとてもよいと言われました。もしまた何かを

つくるときには、この肥料をやってみてください」と効果のあった肥料の名前を知らせてもらったのも嬉しい心づかいでした。そしてさらに「花でも野菜でも育てるということ、は、よく見てあげることなのですね。よく見ていると、どんなものでもこちらの気持ちが伝わってよく育ちますね」と言われたことがとても印象に残りました。

目で見て育てること、毎日々々目で見て愛情を注いでいくことの大切さは、一本のなすでさえそうなら、子どもの場合には計り知れない程大きな意味を持っているといえると思います。一本のなすの鉢は、実以外にもいろいろな意味での収穫を私に伝えてくれました。

○かますの干物

十月の初旬、幼稚園の園外保育行事として、片瀬江の島海岸に親子で地引網をひきに出かけました。予定していた日が天候と網元の都合で延期になっていましたので、この日は是非とも、全員はりきって出かけたものです。そして待てば海路の日和かな、上げ潮に乗って引いた網の中には、近年にない大豊漁と浜の漁師さん達でさえ驚く程のかますの大群が入っていました。大漁に大喜びして、魚を配る私たちも威勢がよくなり、一同とても満足して帰りました。そして次の日の話題は、「昨日のお魚おいしかったよ」ということ

で、かますのフライやら、塩焼きなどが夫々の家の食卓をにぎわした様子がかがわれました。

それから何週間か経ち、もう地引き網のことも話題にならなくなった頃のことです。それは柔らかな秋の陽ざしが砂場にふり注ぐある日の午後でした。

先程から男の子たちは元氣よく砂場に水をためこんでいた様子です。水をたくさん使うと着替えなどもしなければならぬため、そろそろ帰り支度のための片づけを促がそうと思つて砂場に行きました。そしてふと見ると大きなシャベルなどをかけておく砂場キャリアの穴に、プラスチックの魚が一せいにぶら下つて陽に当たっています。「あら!」ちょうど通りかかったM先生と私は、顔を見合せて思わず笑つてしまいました。

「これはきつとこの間の地引き網のときのかますを干しているのね。たくさんあったから干物にしたのね」と言う、魚を干して並べていたA夫は、満足そうにこつとしてうなずきました。子どもの体験は利他的であつて、その瞬間々に生きているという言葉も聞かれますが、一方では随分ときが経ってからでも、何かのきっかけでそのことをふと思ひ出したり、以前の体験が次の遊びをつくり出していく土壌となつている場面を見ることがあります。

とかく現場では体験から活動へ発展させるということにねらいが集約されがちで、地引き網をするとすぐ魚屋さんごつことか、魚つり遊びなどといったように、大人が先になつて課題をつくつていく傾向があるのですが、子どもの中からふと出て来た小さなものの中

にも子どもの心が入れられているのを感じます。ともすると、大きな活動をつくり出していききたいと教師の気持は進みがちになりますが、小さなことの中にも子どもの体験がこめられているのを見落さないようにしたいものです。そして子どもは、自分自身で遊びに没りながら、何かを思い出したり、味わったりしているのです。そのことにも、私どもは気づくようにありたいと思うのです。

午後のゆっくりとした時間の中で見られた小さな活動でした。その遊びを見て、思わず笑みがこぼれてくる楽しい気持を味わったことは私にとっては忘れられないことです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

